



アレクサンドロス大王の生誕地であるギリシャ・ペラの考古学博物館に所蔵されているモザイク画。左側で獅子狩りをしている人物をアレクサンドロス大王と見なす説もある



今年1月、森谷教授(右)はパキスタンのモヘンジョダロ遺跡で調査を行った



パキスタンのヒンドークシュ山脈とインダス川上流部。大王の遠征ではこうした険しい山道も越えたとされている

ソグディアナの「小さな星」

——アレクサンドロス大王の正妃ロクサネ

写真: 鈴木 革

私はここ十数年、マケドニアのアレクサンドロス大王の遠征経路をたどって、ギリシア、トルコ、イラン、パキスタンで調査旅行を行ってきた。文献を読むだけでなく、その土地を歩き、生の空気を吸うことが歴史の研究にも必須であることに、調査のたびに思い知らされる。わずか10年で地中海からインダス川に至る大帝國を築いた大王と特に深い関わりを持つ中央アジアの国が、ウズベキスタンだ。

今日のウズベキスタンは古代にはソグディアナと呼ばれ、アケメネス朝ペルシアの一属州であった。紀元前329年、大王の軍隊がこの地に侵入してきた。ソグディアナ人の多くは徹底抗戦したが、大王はこれを打ち破り、2年がかりで平定した。紀元前327年の春、大王はここで結婚式を挙げた。正妃の名はロクサネ、地元の名族オクシュアルテスの娘である。彼女の数奇な運命をたどってみよう。

二人の出会い、オクシュアルテスが催した豪華な宴会だった。彼は大王をもてなし、高貴な乙女たちを招き入れた。その中に彼自身の娘、美貌のロクサネがいたので



ウズベキスタンの古都サマルカンドにあるレジスタン広場。アレクサンドロス大王もこの地を訪れたことが知られている

とでソグディアナ人と和解し、彼らを帰順させて支配を安定させることだった。

それからロクサネは大王に随行して現在のパキスタンに入った。すぐに男の子を生むが、その子は生後まもなく死亡することになる。紀元前323年6月、メソポタミアの古都バビロンにおいて、大王は熱病のため突然世を去った。このときロクサネは妊娠8カ月。マケドニア人将兵はまず、大王の弟で知的障害のあるフィリップス三世を即位させ、ロクサネが男の子を生むと、その子もアレクサンドロス四世として共同王位につけた。もちろん二人の王に統治能力はなく、將軍の一人が摂政として実権を握った。他方でマケドニア人は、そもそも大王がアジア人を王妃にしたことに屈辱感を覚えていた。征服者である自分たちが、なぜ征服されたアジアの女性に仕えなければならぬのか、と。名目だけの王の母として、ロクサネは軽蔑と反感のまなざしにさらされたことだろう。

紀元前321年、大王の將軍たちによる後継者争い(ディアドコイ戦争)が勃発し、王族はマケドニア本国へ帰った。初めて目にする亡き夫の故郷、だが、これも安住の地ではなかった。本国での権力争いが内乱に発展したのだ。大王の母オリュンピアスは殺害され、マケドニアを支配したカッサンドロスはロクサネとアレクサンドロス四世を幽閉してしまった。故郷から遠く離れ、息をひそめて生きる他ないロクサネの心中

ある。大王はたちまち恋に落ち、祖国の慣習に従ってパンを剣で切り、二人で味わった。これはマケドニアで最も神聖な婚約の印であったという。現存する大王の伝記は全て、アレクサンドロスが彼女に恋をしたと述べている。これが事実だとしても、王の結婚には必ず政治的動機がある。大王の目的は何よりも、ロクサネを正妃とするこ

は、察するに余りある。いつか息子が名実共に王となるのが、彼女の唯一の希望であったのだろう。しかし、それもむなしかった。カッサンドロスはアレクサンドロス四世の成長を恐れ、紀元前310年頃、秘密裏にロクサネ母子を殺害。こうしてマケドニア王家は断絶した。

ウズベキスタンからマケドニアまでは、直線距離でも3500キロ以上ある。新婚のロクサネは異国の兵士に囲まれて故郷を後にし、インダス川を下り、マクラン砂漠を横断してはるばるバビロンに着いた。これだけの大移動に耐えただけでも立派なもの、彼女は決して弱い女性ではなかっただろう。しかし、頼りとする大王を失い、海を渡ってマケドニアに至り、ついには非業の死を遂げた。30代前半だったと思われる。「大王に見初められて本当に幸せだったか」と問い掛けたくなるほど、苦難に満ちた生涯である。

アジアの多様な地形と風土を見るにつけ、あれだけの大遠征を敢行したアレクサンドロス大王に感嘆する一方、従軍した兵士や女性たちのたくましさや圧倒されてしまふ。シルクロードを好んで旅する日本人は数多い。中央アジアの澄み切った夜空を見上げるとき、かつてウズベキスタンに生を受け、短くも波乱の生涯を送った一人の女性を思い浮かべていただけだろうか。ちなみにロクサネとは、現地の言葉で「小さな星」という意味だそう。

<Profile>

もりたに・きみとし

1956年徳島県生まれ。東京大学文学部西洋史学科卒業。同大学院博士課程、東京都立大学助手を経て現職。主な著書に、「アレクサンドロスの征服と神話」(講談社学術文庫)、「アレクサンドロスとオリュンピアス」(ちくま学芸文庫)、「図説アレクサンドロス大王」(河出書房新社)など。